

# 寺崎昌男氏講演会

評価の新段階とFD時代の大学教育

- 大学教員・職員の専門性にふれながら -

6月5日、桜美林大学大学院教授寺崎昌男氏をお招きして、表記のテーマについてご講演をいただきました。寺崎氏は東京大学名誉教授であり、大学教育研究センターの客員教授でもある。大学における講演会も今回で3回を数える。



講演する寺崎氏

講演では、先ず我が国における大学教育政策が重層的な構造をなしており、大学教育に対する評価も同様に多層的になっていること 行政的評価・社会的評価・相互評価・外部評価の併存 が指摘された。行政的評価については緩和もしくは拡大路線にあるが、相互評価ならびに外部評価が、今後、ますます重要性を帯びてくることを強調された。就中、評価者を評価される側が選択できる外部評価は、行政的評価と異なって拘束力を持たず、かなり有益な意見を得ることが可能であるゆえ、積極的に摂取することが大学教育の改善を考える上で必要であると強調された。

続いて、大学における教育職員ならびに事務職員に求められることについて有益なご指摘があった。大学人は自らの教育・研究に対してのみ注意を払うのではなく、大学教育全体の運営に関する意識を持つ必要がある。FD活動の形骸化を防ぐためには、従来、多くの大学で見られた命令研修を避け、課題発見型の研修を実施することが大切である。同時に大学事務職員の能力・専門性を高めることも必須の課題である。そのためにはFD活動とSD活動との間にシーケンスがなければならない。ともすれば「技能」的側面に偏りがちな研修を大学教育に関する「教養」的側面を重視し、これを補う形で進めることが喫緊の課題である。そしてその何れも大学教育先進国であるアメリカに学ぶところ大であると指摘された。

大学教員は「研究と教育(の両立或いは対立)」という図式を乗り越え、時代にマッチした新しい「大学教授職の使命」を構築しなければならないこと、

学術運営の立場から大学の個性については大学教員自らがこれを発見・開拓していく必要があること、そして生涯学習のファースト・ステップという観点から大学教育を捉え直さなければならないことも強調された。

フロアからの質問に対しては、我が国の大学の中で、最も優れた事務職員活動ならびに研修が実施されているのは立命館大学、大阪女学院大学、立教大学であり、その何れの大学においても、大学全体の課題が職員全体に浸透していること、即ち、大学教育に関する情報の透明化と共有化がきわめて重要であることを示された。

(大学教育研究センター副センター長

助教授 三浦真琴)